

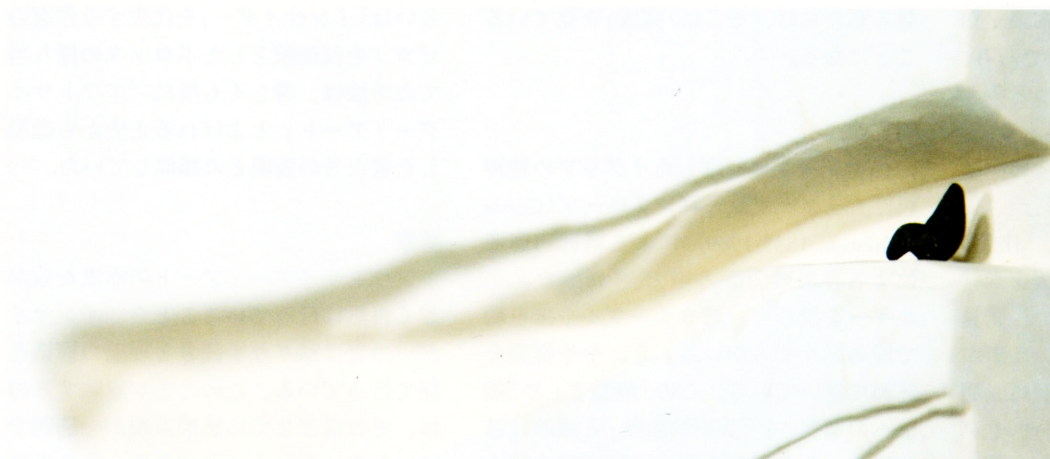
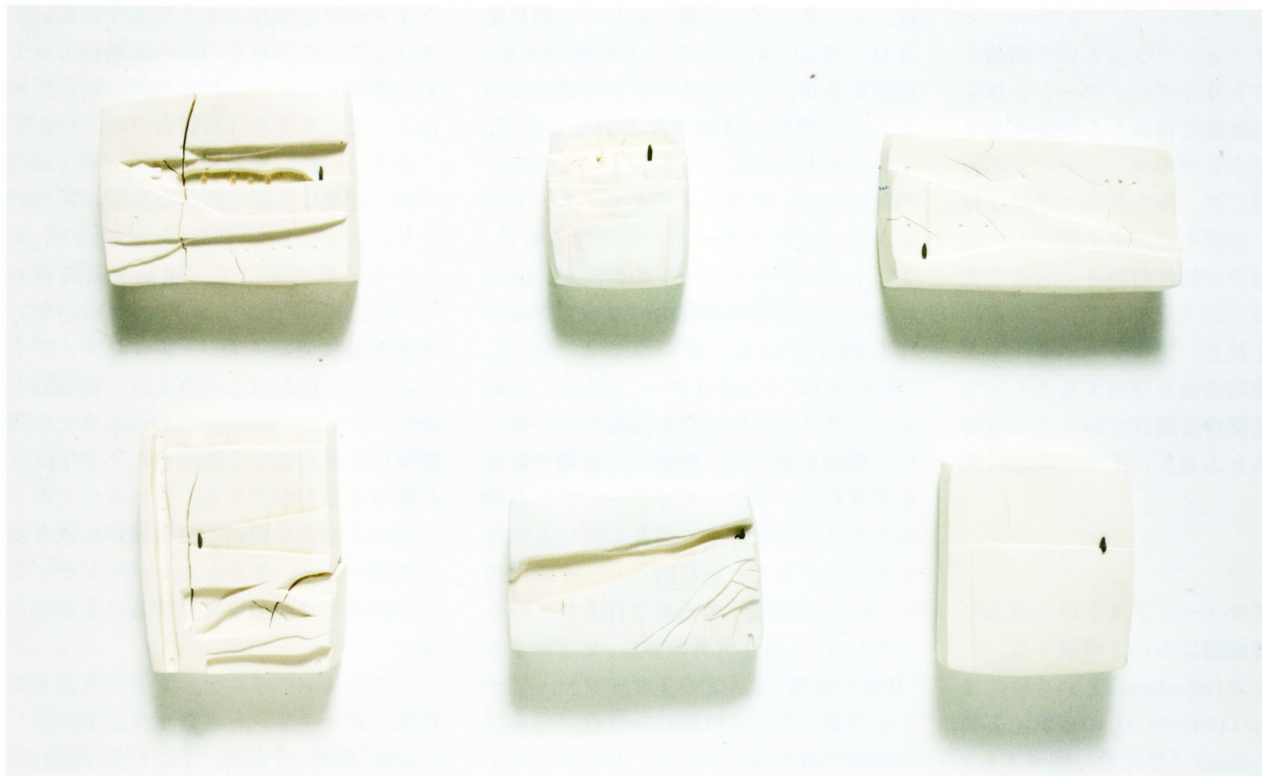
伊藤 さくら

ITO Sakura

造形における『白』の考察 作品「ここではない」及び研究報告書

Research on the Significance of "White" in Art and Design Art Work : "Not in Here" with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域



ここではない

Not in Here

6点組1作品 680×950×80mm

陶

2013年

序章

筆者は、自身の作品制作や作家研究をする過程で、白という色に強く関心を抱くようになった。陶磁に関して言えば、白い作品を制作する作家は少なくない。しかしながら、色の選択肢というのは素材の選択に伴って無限にある。陶磁で言えば土の色、釉薬の色、絵付けの色などである。それらは選択可能な色の要素として挙げられるが、その色は酸化金属と長石、珪石分などといった素材の配合によって生み出されている。配合の方法自体も無数のパターンを持つが、実際にはそれらの要素を組み合わせて作品を作っていくわけであるから、組み合わせとそこから生まれる色の数はそれぞれ無限である。作家は、自身の作品のために無限の色の中から選び出し、更には組み合わせることも出来る。その中で白を選択する理由とは果たして何だろうか。

白というひとつの色を通じて、形態と色彩というふたつの造形要素と、その組み合わせから生まれる意味のあり方について思索することが本研究の目的である。

第一章

まず白という色を最も客観的にとらえる方法として、色彩学における白についてまとめた。白とは、物質が全ての波長の可視光線を反射した際に脳によって知覚される色である。脳科学の研究によれば、白は全ての光を含むことから、複数のホルモンの分泌を促し、筋肉を緊張させる効果があるという。その一方で、色には脳に蓄積された体験や記憶を引き出す力がある。色によって引き出されるものには「体験的記憶(その人の体験から来る色の記憶)」「文化的風土環境(歴史的に、文化的に学習した情報)」「生理的なもの(脳生理から来る普遍的なもの)」があるとされているが、後者の2つは個人の経験に基づき形成されるため、同じ色に対しても各々で異なる反応となる。したがって特定のイメージを明確に伝えるには、色のみでは不十分であると言えるだろう。

第二章

この章では、人々が白を認識した際に思い起こすイメージとは何かを探るため、白という言葉の原義と、人々の生活の中で白がどのような意味合いを持って用いられているかを調査し、まとめた。神話において白はしばしば光や神の象徴とされる。その一方で、ライ病による顔の白さや白髪といったように病や老いの象徴でもあり、人々はそうした白を避けるために数々のまじないを行ってきた。また日本においての白は神事に用いる聖なる色であると同時に、自動車の色として最も好まれている色でもある。生と死、神聖さ、嗜好色。多様なイメージが白には内包されている。

第三章

人が抱く白へのイメージをデザインに落とし込んだ事例として、グラフィックデザイナーの原研哉による「梅田病院」「松屋銀座」を取り上げた。また氏の著書である「白」(中央公論新社 2009年)で述べられた白への思索についてまとめた。原は白にテクスチャを加えて人の記憶を引き出すきっかけを作ることを試みている。梅田病院のサイン計画では、白い綿布製のサインを展開した。白くやわらかい布は、来院する人々にやさしさと、それが常に清潔に保たれていることを意識させる。原は著書の中で「白は色であることにとどまらない」として、白の持つ可能性と自身の活動とにつながりを見出し、白が自身の「デザインのよりどころ」であると述べている。

第四章

筆者の扱う素材である陶磁における白について考察するために、中国白磁の歴史を追った。唐朝以降、特に河北では白磁は日常で用いられる器として最高位のものであり、陶工たちによってその美しさは極められていき、北宋時代に完成を見る。しかしその後政変によって最盛期の美しさは失われ、やがて白磁は染付けの下地として用いられるようになる。後半では、筆者自身による陶磁素材を用いた白の表現の実験レポートを掲載した。

第五章

この章では、白を扱う作家を3名取り上げ、人が創造という行為をする際の白の意味について論じた。建築家のル・コルビュジエは自身の建築を白に塗りつぶすことで、清潔感や清新さを求めた。デザイナーの平野敬子は、白は光であると語る。作家の川崎毅は、面や陰影への強い意識から、白へとたどり着いた。3名の白はそれぞれ異なるが、どれも素材や作られる過程、完成物の着地点といった要素が白に加わり、そこに更に個人の思索が入り込んでいった結果である。作家自身の言葉と作品とを並べると、白に透けてその思想が見えてくる。

制作報告書

作品「ここではない」の制作に至るまでの素材の検討から思索の過程、そして実制作のプロセスについて述べた。作品は素材を磁土として、カンナで削りだすという成形方法をとった。焼成によって生じる亀裂を作品の一要素として取り入れ、土そのものの素材感と存在感とを引き出すことを意図した。

終章

白は多義な色である。創造や始まりの光であったかと思えば、老い、そして死の悲しみを思い起こさせることもある。清新さの象徴となつて、時代の最先端を人々に知らしめたかと思えば、儀礼においては神に向き合うための伝統的な装いを彩る。多義であるからその意味をひとつに決めることが出来ない。白とは、多義であるがゆえに意味を失った色である。そこで白を選択し、ひとつの意味を示唆するには、白の他に何らかの要素を加える必要がある。白と要素の組み合わせはこれまでに経験し得なかった感覚に人を導く可能性を秘めている。

造形における白とは、平坦で何も無い場所であり、それゆえにあらゆる可能性を確かに内包している色なのである。